

「洗脳」言説を越えて加害認識を伝える

—— 戦犯作家・平野零児の語りを通じて ——

石田隆至・張 宏波

連載にあたって

中国帰還者連絡会（中帰連）は、一九九〇年代以降の歴史認識論争において右派から「自虐史観の元凶」と攻撃されたことを受けて「季刊中帰連」を創刊し、これに応戦論戦したことで知られる。同会は、中国の戦犯管理所で特徴的な「認罪教育」を受けた元兵士らが帰国後も加害認識を保持し、証言活動等を通じて反戦平和・日中友好を掲げ続けた組織として知られている。加害の事実を直視しようとし、戦後社会において、彼らの証言の多くが加害行為の告白と認罪の体験に集中したため、そうしたイメージが形成されたといえよう。

ただ、聴き取りや史料調査を通じて会員一人一人の帰国後の歩みを見つめると、むしろ「認罪を貫くこと」の困難さが浮かび上がる。例えば、帰国戦犯一〇六九名のうち、証言活動をしたり回想を残した人はむしろ少数派であったこと、文化大革命の余波を受けて組織が分裂して運動が停滞した時期が二〇年近く続いたこと、証言等の活動が活発になるのは会員の多くが定年を迎えて以降であること、戦争責任問題が残ったままながら高齢化のため組織を解散せざるをえず、活動を継続化できなかつたこと等である。これらは、中帰連の内在的問題であるだけでなく、戦争責任・戦後責任と真摯に向き合つてこなかつた戦後

社会との相互作用の帰結であるともいえる。とはいえ、戦後社会で加害の側面を意欲的に伝えようとした市民組織が例外的な存在であることに変わりはない。中帰連の多様な姿に迫ることを通じて、彼らが向き合い続けた戦後日本社会とは何かを逆照射することを課題としたい。中帰連が向き合い続けた社会にわれわれは今も生きているからである。

一、加害の語りを受け止めよう とし、社会

一〇〇〇名余りの日本人戦犯が帰国した一九五六年は、経済白書が「もはや戦後ではない」と誇らしげに宣言した年でもある。

ところが、戦犯たちが目の当たりにしたのは、本質的には戦前・戦中と変わらない認識を保ったままの日本の姿だった。帰国直後の『朝日新聞』は「総ザンゲの戦犯達」と揶揄する記事で彼らを迎えた。後の回で扱うが、島根県のある戦犯は帰国して間もない頃、戦犯管理所で獲得した加害認識を故郷の人々にありのまま証言した。しかし、聴衆からは激しい非難の言葉が浴びせられたという。加害の事実を認めてアジア諸国への謝罪を口にするのは、共産主義国家となった新中国に「洗脳」されたからだという見方は、新聞も民衆も同じだった。帰国後は戦前の特高警察に代わって公安警察が彼らを尾行するようになり、就職や日常生活が長期にわたって脅かされた。

帰国時に三、四〇代であった者が多いため
仕事や生活に追われる日々が続き、六〇年代
半ばからは文革の影響による組織の分裂もあ
つて、初期の活動はやや地味な時期が続いた。
それでも、帰国の翌年に刊行した神吉春夫編
『三光・日本人の中国における戦争犯罪の告
白』（光文社）等を通じて、加害認識を伝え
る努力がなされた。同書は初版五万部をたち
まち売りつくした一方で、右翼から激しい攻
撃を受けて絶版となったが、出版社や書名を
変えて現在も出版され続けている。

同会が聴衆に直接加害の証言を行うことを
活動の柱に据えるようになるのは、八〇年代
に入ってからである。歴史教科書問題や中曾
根首相の靖国参拝問題などが起きた時期でも
あるが、戦争を経験していない世代が社会の
中心を担うようになって、少しずつ加害の語
りが受け止められるようになったといえる。

ただ、その語り口は、基本的に帰国直後に
「非難」されたそれとさほど変わっていない。
加害者の視点からの戦争犯罪の告白と謝罪、
それを可能にしてくれた新中国への感謝とい
う内容である。戦争への反省が希薄な戦後社
会において、そうした視点から加害の事実と
反省を語ることは重要であった。ただ、
定型化された語り口になったことは、「思想
教育」のインパクトが大きかったことを示す
と同時に、「洗脳」視が続く一因にもなっ
ている。これをどう乗り越えるかは、同会が最
後まで捉え続けた課題であった。

二、知識人戦犯が直面した課題

他方で、定型化された語りの困難さに正面
から対応する必要性に早い段階から迫られた
帰国戦犯もいた。公的な場での発言が求めら
れる大学教授、政治家、作家、公務員等であ
る。「洗脳」視が支配的な状況下で彼らの言
論の妥当性を担保するには、まず「洗脳」言
説を打破することが不可欠であった。しかし、
「洗脳視」する日本社会のあり方を直截的に
批判しても、余計に「洗脳」されているよう
に映ってしまうという悪循環から抜け出せな
い。「洗脳」されているわけではないが、「無
反省」でもないという地平を示すという容易
ならざる課題が彼らを捉えた。

本稿では、その困難な課題に初期の段階で
向き合った作家の平野零児（一八九七—一九
六一、本名横夫）に着目する。平野の帰国後
の表現活動を通じて、戦後社会がどのように
戦争の反省に向き合ってきたのかを検討する。
平野は帰国後すぐに雑誌や新聞への寄稿を
始めたのに加え、戦犯収容体験を綴った二冊
の本の執筆に着手した。帰国して数カ月後の
五六年一二月に『人間改造』私は中国の戦犯
であった（三一書房）を、翌年一月に『中
共虜囚記』（毎日新聞社）を相次いで出版した。
また、五九年には義兄にあたる河本大作に関
する伝記も発表している。六〇年代でも帰国
戦犯による出版物はまだかなり少ないことを

考えれば、例外的に早い段階での成果である。
帰国時に五九歳と比較的年齢が高く、戦前戦
中の記者・作家時代の人脈の後押しがそれを
可能にした側面もあるようだ。

上記三冊の著作以外にも、雑誌に寄稿した
随筆などで戦犯収容経験に言及した文章が散
見される。そこには「洗脳視」言説の内実を
問い返し、「洗脳」経験の是非を見極めつつ、
なおかつ自身の戦前戦中のあり方とも距離を
置いた姿勢をとることによって「無反省」「日
本賛美」からも距離を置こうとする独特のス
タンスが見られる。一部の大学教授や裁判官
等のように、中国で得た加害認識から距離を
置いてしまう、あるいは「洗脳視」言説に近
づいていくといったあり方とも違った、非常
に興味深い姿勢を貫いていた。

平野がとった立ち位置の可能性を検討する
ことは、加害語りに対する「洗脳」視や「自
虐史観」批判が今も根強く続く故に、現在の
意味をもつ作業であるといえる。

三、「ありのまま」伝えること の困難

平野の特徴を示すために、例外的に早い時
期に出版されたもう一つの回想録と比較して
おきたい。平野の『人間改造』と同じ三一書
房から刊行された野上今朝雄ほか著『戦犯』
（五六年一〇月）に掲載された四人の戦犯の文
章には、語りの「型」の共通性を指摘できる。

分量的に短い一編を除けば、基本的な構成として、(生い立ち―戦争中の加害行為の告白―戦犯管理所での認罪・反省―反戦平和への決意)という「型」が見いだせる。皇国史観に代わって管理所で新しく獲得した階級論に基づくと加害者としての視点は彼らにとつて新鮮なものであつたらうし、日本にもそれを伝える必要性を感じたが故の出版だつた。その認識や経験をありのまま伝えることが、「洗脳」や「総ザンゲ」といつた「冷やかし」に對抗することになると位置づけられていた。

以下で取りあげる平野の語りにも、共通する側面はもちろん存在する。しかし、「ありのまま」を伝えるだけでは伝わりきらないものがあるという側面を意識していた点が異なる。

例えば、帰国船が舞鶴港に着いた後、出迎えにきた親戚や旧友に囲まれながら、平野は戦中戦後に何があつたのかを一通り話した。戦犯管理所では衣食住の心配なく健康が保証された不自由のない生活を送り、釈放前には中国各地への参観旅行まで経験させてくれ、日本帝国主義が去つた後の新中国の発展をみて、戦争の残酷さとそれがいかに人を不幸にするかを学んだ、と一氣に話した。これに対して、出迎えた平野の姪は次のように応じた。

オジさん、仰言ふことは、よく判るわよ。だけどね、それじゃベタ賞めよ。物は一方的では駄目よ、その間、日本も変化してゐるのよ。戦後の苦しみから、みんな

な立ち上つてゐるのよ。それとこれとをよく見較べてから、ゆつくり仰言いよ。まだ早いわ……

「無論だよ。そりゃ判つとる」と応じた平野だが、「全くのところ、今浦島は玉手箱を早く開き過ぎたようだった。愛姪の一矢は、私を大騒ぎで迎えてくれた多くの知己交友の意見を代表していた」とも記している。実際に、その後多くの知人から同様の指摘を受けたようだ。戦後まもない日本では、戦争を反省する姿勢自体が奇異に映つたようである。戦争協力への総括をせず戦後も文筆活動を続ける文学者が少なくなつた中、平野も中国での経験等に触れずに、戦後民主主義という新しい政治文化の中で仕事を再開するという選択もあつただろう。しかし、彼は容易には伝わり難い「何か」を伝えるという道を選んだ。

そこで私は玉手箱を開けるまでもつと慎重に、離れていた日本の姿を、そして真実を衝かねばならない。それでないと開けた玉手箱は矢張り「煙り」になつて終うおそれがある。「略」私は、開けて口惜しい、四散するよう玉手箱は持つて帰つていないつもりだ。

「玉手箱」という表現に込められている通り、管理所で何か大事な「贈り物」を受け取り、それを日本で「開ける」必要があると感じている。そして単に「開ける」のではなく、「開け方」には配慮が必要であることも自戒

している。以下に見るように、帰国後に発表した文章の中でも、とりわけこのテーマに関するテキストは慎重かつ機知を含ませた説明的な表現となつており、直截的に表現した野上ほか「戦犯」とは明確に異なる側面がある。それはいったいどのような試みだつたのか？

平野の帰国後の言説を検討する前に、帰国までの歩みを簡単に振り返つておこう。

四、帰国までの歩み

一八九七年に兵庫県の篠山に生まれた平野は、軍人一家に生まれながらも文学を志し、上京後に馬場孤蝶の文学サークルに顔を出すようになった。そこで自由主義的な思潮に触れ、リベラリストを称するようになる。文学で身を立てるためにまず新聞記者になつて見聞を広めようと、一九一八年大阪毎日新聞社の社会部記者になつた。二八年特派員として濟南事変に従軍後、三一年から作家生活に入る。三二年には中央公論特派員として「瀋州事変」に従軍し、ルボヤ小説を発表した。翌年には文藝春秋社特派員としても取材活動を続けた。その成果として『満蒙細描』(平原社、三三年)、『満州国皇帝』(平原社、三五年)などを発表する。この頃、満州炭鉄株式会社理事となつた義兄の河本大作を頼つて満炭嘱託の身分も得ていた。四一年、アジア太平洋戦争が始まると従軍作家として徴用され、約一年半にわたつて東南アジア各地を転々とし

た(「マンゴウの雨」天佑書房、四四年)。

復員後の四四年、統制が厳しくなった日本を嫌い、中国山西省で山西産業社長を務めた河本大作を再び頼って太原へ渡り、同社嘱託の身分を得た。四五年八月には同地で敗戦を迎えたが、山西省の日本軍は組織的に残留し、国民党系の閻錫山勢力と結んで共産党軍との内戦に加担するいわゆる「山西残留」が進められた。残留の首謀者の一人が河本だったことから、平野も残留する。この期間には、作家・記者としての経験を活かして残留日本人の士気高揚のための文化的煽動を担い、雑誌

「晋風」等の執筆・編集・発行に従事した。

一九四九年四月に太原が陥落して日本軍の残留活動も終焉を迎えると、先に留置所(公安局第三科)入りした河本の後を追うように一年あまり収容され、主に河本の活動に関する尋問を受けた。釈放後しばらく経って、山西省にいた日本人の大半が隣の河北省永年県にある「軍事訓練団」に収容されたのと同様に同所に送られ(五〇年一月)、さらに五二年一月には太原戦犯管理所に移送された。公安局第三科に留置されて以降、五六年夏に起訴免除で釈放されるまでの七年以上にわたっていわゆる「認罪教育」を経験し、次第に日本や自身の振る舞いについての捉え方が変わっていった。その詳細な過程は次回扱う。

帰国前の経歴に触れる上でもう一つ述べておかなければならないのは、並外れて個人的なその人柄についてである。「書かない作家」

「ぐうたら飲んべえ平野」という評価は自顧にとどまらず、周囲も総じて認めるところであった。それは「人間改造」に寄せられた二つの序文に端的に示されている。

断るまでもなく平野さんは、もともと筋金入りの左翼でもなければ、シンパでさえなかった。そんなものとはおよそ遠い、多少失礼ない方をゆるしてもらえぬなら、むしろダラしないグータラの方の旗頭でこそあったといつてよい。(中野好夫、二―三頁)

呑んべえの平野さん、だらしない平野さん、そのくせちよつと如才ないところがあつて、誰もが憎むことのできない平野さん(中略)とにかく罪のないグレンタイみたいなのが、かつての平野さんではなかったか、と私は思うのである。(深尾須磨子、五―六頁)

また、七三年に講談社が編纂した「大衆文学大系二九 短編集 上」には、一九三五年に平野が発表した時代小説「袴垂夜襲」が収録されており、巻末の著者略歴には次のように記されている。「作品よりもむしろ、天衣無縫なその人柄によって多くの者に愛され、一種の文壇名物男であった」(八〇五頁)。

戦前戦後にわたって作家仲間との交流には事欠かず、「菊池寛、大仏次郎、吉川英治、直木三十五、松村梢風などの大衆作家の名声のある人々に、文才は認められないが、因縁情実をたどって、その知遇のおかげで作家生

活がどうやらできた」と自らも述べている。

こうした側面は、平野が「洗脳」言説と向き合うことをさらに困難にする一因でもあった。序文執筆者の記した次のような驚きに対しても応じなければならなかったからである。「平野さんはたしかに中国から日本へ帰ってきたのである。しかも内容外観共にアツというほどの変貌を遂げて。」(「人間改造」六頁)。

五、「認罪」という経験をどう伝えるか

先に述べたように、中国での獄中経験を通じて加害性を明確に認識するようになり、ようやく日本に帰れた事実を、何らかの形で発信していきたいと平野は考えていた。ただ、「洗脳」言説は強力な論理構造をもっていた。つまり、「ありのまま」語って戦争責任を表明しても、「洗脳されてはいない」と否定しても、「洗脳視」をいっそう加速させてしまう。さらに、平野は自身の過去の姿からすれば大きすぎる「変化」だったことから、「洗脳」批判を乗り越えていくのは何重にも困難であった。

こうした複数の制約が、平野の回想録の構成や内容に、その後出版される他の戦犯のそれとは大きく異なる特徴を与えている。

第一に、戦犯管理所での認罪の経験を記述対象としながら、苦悩の果てに認罪したことではなく、いかに認罪できなかったのかを描

くの紙幅の大半を費やしていることである。帰国までの半生を振り返るといふ色彩の強い「人間改造」は、全二一〇頁のうち四九年に逮捕されたからの記述に一九〇頁とその大半が費やされるが、残り一〇頁ほどにならないと「認罪した」という話にならない。大半が管理所の教育内容や対応に対する反発や疑念、前進と揺り戻しを繰り返す日々の記述等で占められている。例えば以下は、戦犯管理所に入ってから一年程経った五三年頃の様子に関する記述である。一通りの罪行告白は終えた後の段階で、再度不明確な点に対する追究が始まったことへの反発が記されている。

「矢張り支那人だ、ねばりの強い、しつこさが失せない。もう今時誰が、嘘をいうものか、これじゃ結局態のいい拷問じゃないか」とわたし自身には、別に坦白（犯罪告白）問題では残るものはなかったが、仲間の困惑した有様を見兼ねて、又しても、本性が出て中国人民に頭を下げる気持ちは何処かへ吹っ飛ばしていた。実際にまだとぼけている者もあるらしいかったが、それに対しては、「そんな者も何時までも一緒にされては堪らない、ちゃんと明らかにした者は、先に処理をしてくれたらよからう」と、結局は、自分本位に考えていららしていた。

こうした記述が繰り返すため、いつになつたら「変化」が現れるのか読者が不安を覚えるほど先が見えない展開になっている。

ほぼ同時期に発表された「中共虜囚記」では、「山西残留」末期の様子から逮捕を経て永年軍事訓練団時代の様子を中心に描いており、その後の太原管理所時代の記述自体が数頁しかない。従って、こちらでも「認罪した」時点の記述はごく僅かにとどまる。とはいえ、それは決して認罪したことを否定するためでもなければ、「洗脳」されていないことを示すためにあえて触れなかったわけでもない。「あとがき」には次のような記述がみられる。

私は自他ともに許した、グウタラ飲んべえであった人間が、そのような男が、博大な中国人民の寛容のなかで、ほとんど最後のドタン場まで、その真意をくみとり得なかつたあわれな者であったという姿を、ここに振り返ってありのままを記述することによって、過去いかに自分自身をそこねたか、無知と自惚と野心とが、その過誤を知るにいたるには、いかに手数のかかるものであつたかということと、これを人道の大義のために、この愚かな私をしんほう強く、忍耐強く、飽くまで道理と道義と、人情をもつて目をさましてくれた、偉大な国家が隣国にあつたことを知ってもらえれば足ると思うのみである。

「変化」の後のこうした認識は、他の戦犯の回想等でも見られる内容とおおよそ一致している。ただ、罪の告白を終えてもなお、従来の考え方を脱して中国側の意図が理解でき

ず懷疑的であり続けた姿を晒している点は、犯罪を告白することに伴う苦悩を中心に据える他の自己史・回想録のあり方に比べれば、大きく異なる。軍人経験がないため、捕虜虐殺等が問われていない平野は、それほど苦痛を伴う罪行告白ではなかつたからだともいえる。ただ、「人間改造」という題名を掲げながら、「認罪」への抵抗感や中国側への嫌悪感について読者を閉口させるほどさらけ出し続け、結局何が「変化」の決め手だったのかさへはつきりせず、認罪後の心境の変化もごく控えめにしか触れられていないという逆説的な構成には、ある狙いがあったと考えた方がよい。

かつて共産党を敵視してきた平野が「変化」自体を強調すると、逆に「洗脳」に見えてしまう。そこで、皇国史観に染まつた自身の問題を認識せよと迫られても抵抗が大きく、中国側が提示した異なる観点からものを見て、も疑問が生じるばかりだったという「経過」を強調することで、多くの戦争当事者世代と共通の感覚をもつていたことを示し、理解への入り口に導こうとしたと考えられる。「変化」がどのように生じたのかという「過程」に関する記述に重点を置くことで、変化の「結果」から焦点を移そうとしたと考えられる。これは第二の特徴に繋がっていく。変化に至る過程を粘り強く描き、長い時間をかけた僅かな変化の積み重ねや、前進と後退を繰り返すなかで気が付けば「変化」を実感できる

ようになつていたと叙述することで、何か特定の「要因」や強い「衝撃」があつたが故に「洗脳」が行われたのだという見方を挫こうとしている。いわば「変化」観そのものを崩していくアプローチを取つたといえる。

三番目の特徴は既に触れたが、中国側への感謝の表明も、自身がどう変わったのかについての記述も控えめであることだ。容易に「変わる」ことなく抵抗や逡巡を繰り返したことを十分に描いてあるため、その「過程」の全てに丁寧に対応した中国側の姿勢を合わせて描くことで、その努力や寛大さの意義は言葉を尽くさずとも伝えられると考えたのだろう。

六、「洗脳」批判を無効化する

試み

二冊の自己史で「洗脳」視を転換させることを試みた平野は、その上で新しい視点に基づいた表現活動を展開したいと考えていた。

私なりの罪悪を反省して、強くより積極的に生きる意欲に燃えている。私はこの一見変つた世相の中に、意識的に突入する覚悟だ。

嘗ての日本民族の驕慢を棄てて真の尊い民族意識に、私は新しく、若々しく生きるために、この狂燥の中に大きくステップを踏み出したい。

ところが、その後書かれた随筆等でも繰り返し、自身の「洗脳」体験について振り返り

り、位置づけ直すような言及が散見される。

帰国後に平野の書いた文章を集約した書籍に、遺稿集の「らいちゃん」がある。収録された文章は、作家仲間との交友録、住み着いた横浜や自宅付近に関する雑文、文学を中心にした社会、政治等さまざまなテーマで書かれたエッセイ等にカテゴリ分けされている。その中に「帰って来た戦犯」というカテゴリも存在し、戦犯収容経験について書かれた文章が集められている。他のカテゴリの中でも、ところどころで中国での自身の経験や知見に触れている。例えば、次のような一文がある。

「洗脳後の三年」

私が本誌（民主公論）に時々投稿を始めたのは、中国から帰還して後のことだから、まだ二年位にしかならない。（略）その私が、本誌に最初の随筆を投じた頃、「あの男は、洗脳して来た男じゃないのか」といった人があつたことを耳にした。洗脳とは思想改造のことである。

確かに六年間、私は中国解放軍に捕らえられ、中華人民共和国、解放軍華北軍区訓練所という厳しい名の中で、訓練を受けた。

帰国して三年を経てもなお「洗脳」に関する話題を取り上げ、説明をしなければいけない状況にあることが分かる。そして、「人間が人間を訓練するという（略）寒に僭越なこと」がなぜ行われたのかについて、以下のようにかなり丁寧な説明を施している。

中華人民共和国は、永年の外国帝国主義と、国内の少数売販資本家達によって植民地国家となつて最大多数の人間が、貧困と奴隷的生活の底におとし込まれてきたに反対して、革命を成就した。そのために人民を資本主義、帝国主義、外国侵略主義の桎梏から解放した。

然し国内には六億の人民の悉くが、その解放を心から歓迎したかどうかは疑問である。

そこで先ず社会主義国家に向い、やがて共産主義社会へ進み、更に大同の社会へと社会を発展させるために、古い思想を残している者の思想を改造しなければならぬ。

そのための思想の改造を、つまり教育、訓練を始めねばならなかつた。

私達中国大陸に放浪した者は、日本帝国主義の走狗として、過去の中国人民を侵略した。しかも、中国解放軍を敵に廻して、反革命運動をやつたのだからそのような反革命分子は、先ずその誤りをなおすために、思想改造を強要せねばならぬというので、収容所に六年間抑留し学習をさせたのであつた。

日本では「洗脳」といわれた思想教育が、国民や外国人を強制的に共産主義思想に染め上げるための教化ではなく、社会事情に応じ取られた教育的措置だと位置づけられている。内戦に勝利して共産党が新中国を成立さ

せたとはいえ、共産主義に懐疑的あるいは反動的な立場の者もいる。そうした人たちに對しては、新しい国の基本原理を十分に理解させるところから出発する必要があった。

他方、戦後も残留して共産党と戦い続けた日本人戦犯もまた、共産党の掲げる目標を理解することなく革命を妨害したわけで、対処策として同様の教育が施されたのは当然だとみている。思想教育を受けたのは日本人だけではなく、中国人にも広く行われたものだという点を明確に示すことにより、偏狭な政治的意図があつて行われた教育ではなく、国民的取り組みの一環だったことが確認される。

さらに、「思想改造」の「結果」についても詳しく説明している(傍点引用者、以下同様)。

この六年間、私達は自然共産主義義国家の信奉するマルクスレーニン主義の理論を学んだ。然しこれが洗脳ではなかった。中国が私を釈放したのは、「拘留期間中の悔悟の態度」が良かったからで、マルキストになつたからではない。だから帰国しても、舞鶴からすぐに代々木の日本共産党本部へ駆け込みはしなかった。

拘留中考えたのは、前記のように私の半生の回顧だけで、余り自己反省はやらなかつた。(略)だが、「平和は飽くまで守らねばならない」私が洗脳の結果の思想はこれだけである。(略)私の思想改造は、この程度である。この程度の反省は八千万の正しい日本人なら、今日では

誰も意識している問題である。

ここでは、戦犯が受けた「教育・訓練」を「洗脳」と呼ぶこと自体は否定していない点に注目しておきたい。ただ、「洗脳」の内容としては、共産主義イデオロギーの強制的注入ではなく、戦争を礼讃する態度から断固平和を尊ぶ姿勢へと変化するために共産主義思想の学習が媒介とされたことが強調されている。しかも、平和を尊ぶ姿勢であれば当時の日本人なら誰でも深く実感している境地であることを付け加えて、戦犯らが特別な思想を植え付けられたのではなく、一般の日本人と何ら変わらない思想を持つに至つたことを確認する。それを「洗脳」と呼ぶならあえて否定しないことで、果たしてそれは「洗脳」と呼ぶ必要があるのかと逆に問いかける構成になつている。こうすることで、「洗脳」言説そのものを無効化させる手法をとっている。しかし、これだけではまだ「ベタ褒め」を続けていると言えなくもない。そこで、帰国後に社会主義諸国に起きた新しい動向、しかも平野にとつては中国での経験や認識を揺るがしかねない事態に関する反応をみておこう。

七、礼讃でも全否定でもなく

「地震がおそろしい」

私は戦犯なるが故に、まじめに自分の過去を反省し正しく生きようと考えるようになった。民主国家、社会主義共産主

義国家は他国を侵略するようなことはないと思つておくと、ハンガリーの問題が起つた。スターリン批判の後に、ソ連では国内でも、またもや批判者が批判されそうだし、ユーゴのチトー主義とソ連とがまた離反しそうな傾向さえみえてきた。日本の共産党もゆれているらしい。元来が日和見的な態度しか持てない私など、さっぱりわからないことが多い。みんなゆれてからでないかわからない。この地震は「このくらいだったか」とホツとする程度。相変わらず情けない自分だとなつて思つた。これではまた懐疑的な人間に逆戻りしそうで危ない。

社会主義国家は平和勢力であるという「思想教育」を管理所で受けてきたし、日本国内にも社会主義を理想視する一定の気運がある時代だった。その中で「平和勢力」による他国への介入という事態が続いたことで、それに対する疑念をこのように明確に示している。決して不動の固定的観念に立っているわけではなく、地に足の着いた柔軟な姿勢で発言している様子は「被洗脳」イメージとは相容れない。また、社会主義諸国の動向に疑念を示しているとはいえ、直ちに「決別」するといふ姿勢でもない。むしろ、それを地震の揺れに掛けて、自身が「日和見的」だから情勢に応じて立場が揺れてしまう存在であり、下手をすると「逆戻り」してしまいかねない懸念まで示される。「洗脳」された不動の境地に

立っているわけではないと比喩を交えて語り、再び「洗脳」観を脱臼させようとしている。

ただ、社会主義から「決別」するのでもなければ全面的に「擁護」するのでもないその姿勢は、単なる「相対化」や「戸惑い」との違いが明確ではない。しかし、次に見るような、さらに踏み込んだ中国論評には、彼の独特の「距離」の取り方が示され、興味深い。

革命後しばらくは共産党中央から高い評価を受けていた文学者の丁玲（一九〇四—八六）が、五七年からの反右派闘争で批判に晒されて失脚したことを受け、次のように論評した。

「雪解けにすべった丁玲女士」

私はこれらの問題に対しては全くのスキのぞきで、正確な事実もつかないないし、用意もない。けれどもただ一ついえることは、このようなことは常にあり得ることで、別に驚くほどのことはないということである。

「そんなことでは、共産国家の文士なんて者は、おっかなビックリで、安心して創作なんかできないや」という人があるかも知れない。永い間、私はこの国の戦犯として、管理所のヘイのなかにいて、あの三反、五反の反革命の肅清、胡風問題などの厳しい整風運動は、私達自身のいわゆる学習の課題でもあった。その体験の中で、いえることは反動的思想を持つていたら、創作活動は愚か、思想改造なんか全くおっかなビックリで、常にビ

クついでなければならぬことは事実であった。

それこそ、一つの恐怖政治ではないかということになる。私は確かにそうだと答える。（中略）何故かなれば、中国は共産主義を奉じる国家であるからである。一つの真理、一つの信念、イデオロギーの下に、革命という大事業を行い、共産主義国家をめざして、新民主主義国家、社会主義国家へと歩み出している国である。

確かに全体主義ともいえるであろう。少数が異をたて、グループを作り、小集団活動を行うことは、反革命者としてのラク印が押される。軍国主義、ファッショの重圧の下に、悲惨な敗戦と、戦禍を喫した日本人としては、あの当時の、全体主義的暴虐時代を顧み、今にリツ然としたものを感じる人々には、中国の全体主義も同じだと思ふ人があるかも知れない。そう思ふ人々は「それ見たか」とこおどりする。その人々は、ファッショもイヤだが、共産党もイヤだという人々だからである。

ある思想を唱えることで抑圧されるのでは「恐怖政治」「全体主義」ではないかという日本の社会主義観あるいは中国観を正面から捉え、ひとまずは「確かにそうだ」と引き取って批判する。また、それが戦中日本の全体主義を想起させることへの理解も示し、一般的

な感覚を共有していることを表明する。ただ、戦中日本の全体主義とそれに抵抗した共産党の「思想改造」を同一視して批判する人々へは留保を示し、中国共産党の取り組みについて自身の経験に基づいた見解を示そうとする。

私はかつて共産党国家はなぜ腐敗しなやかという設問の回答に対して、それは批判と自己批評があるからであるということを知ったことがある。私自身の管理所生活の中でも、この批判と自己批評は常に行われた。日常茶飯の生活に対しても、週末には必ず生活検討会というのが開かれて、一週間の自分の生活態度や思想の動きを検査し、また仲間の人々のことも批評し合うことが行事となっていた。これは私達戦犯だけに行われたことではなく、私達を領導する管理者、工作員、検察官、警戒の保衛員（軍隊組織の公安局員）達も、みんな一様に、それぞれの単位が同様に行われることになっていた。

胡風問題が取り上げられると、一せいに人民日報その他の新聞で詳細にこれが報道される。するとそれは、全国至るところで、各界各層の学習単位で、この問題は検討されるのである。例外はないのである。けれども正直なこと私達にはこの生活検討会は、何としてもいやなことだ、辛いことだった。週末がくるとこれだけは先にいったように、それはウンザリした。しかしこれは戦犯なるが故にや

らされるのではなく、この国の生きて行く者は、ことごとく行われねばならぬことであつた。これが行われなかつたら、この国はいつ逆戻りするか分からぬからであつた。

平野自身も管理所等で経験した自己批判や相互批判は確かに息苦しいところがあることを率直に認めることで、読者と同じ視点をいっただん共有しようとする。しかし、単なる中国共産党批判にとどまるのではなく、どうしてそんな息苦しいことをするのか、その必要性と進められ方について説明が及ぶ。自己批判や相互批判が戦争犯罪人や反体制者など負の烙印が押された特定の人物を吊り上げるためのものではなく、上級下級を問わず、全国的に展開された運動であつたことを指摘する。丁玲を持ち出したのも、革命文学の中心にいたような彼女でさえ、その批判の渦の外にいられたことを示すためである。六一年に没した平野は文革を知り得なかつたものの、過激化する反右派闘争の問題性は聞き及んでいたはずである。それでもなお、このような運動の必要性を擁護したのはなぜか？

平野の経験からいっても、自己批判・相互批判といった厳しすぎると思われるような手段でも用いなければ、身体化した思想や価値観を客体化し、相対化するのには容易ではないことを伝えたかつたのではないだろうか。帰国後何年経つても、自身の経験に基づいて对中国観や「洗脳」視を変えていくための工夫

を凝らした文章を紡いでいかなければならぬ戦後社会を生きる中で、日本社会が変わることの難しさと、そんな自身が変化できたのは、あの「厳しい」認罪運動があつたからだと確信を深めたのではないだろうか。加害者の視点に立つという観点を得るためには、厳しい自己批判や相互批判抜きにはなしえなかつた。それでもまだ「逆戻りしなう」な自分を感じているのだからなおさらである。そして、中国では今も一見息苦しいだけの国民運動を展開しているのは、ファッショでも全体主義でもなく、それをしなければ自己を改造し新しい思想に基づいた国づくりをしていくことが容易ではないからである、と。

逆にいえば、そのように自己を批判し、相互に批判しあうような契機を持たなかつた日本は確かに「自由」だったのかもしれないが、中国への視線が戦前と連続していて変わっていないことにもつながっているのではないかと平野は懸念する。こうした複眼的な捉え方をしなければ、日本からの視点も逆の「一辺倒」に過ぎない、と。そう考えれば、上の引用に続く箇所、丁玲が厳しい批判に晒されたことに関して論評した以下の記述も、「中国一辺倒」ではない姿勢が見えてくる。

要は丁玲女史に限らず、前記の有数政治家たちはひとしく昨年の百花斉放、百家争鳴の機運に乗じて、かつての胡風問題を引きもどそうとして、党の官僚主義、セクト主義、主観主義を攻撃したのは好

いが、それは遂に党の指導性やプロレタリア独裁を否定する、反社会主義的傾向に走つたからである。簡単にいえば、雪解けに調子に乗り過ぎて内在していたブルジョア観点が露出したためである。〔略〕以上の簡単な彼女の歴史からも彼女自身いつている如く、小ブル思想の根は深い。胡風の犯した道を彼女も「雪解け」にすべつたのであらうと見られなくもない。小ブル、インテリの多くがたどる文学の道は、共産社会の坂道になるとけわしい。民族ブルと、小ブル、インテリはこの社会では、うっかりすると、すべり落ちる。

一見すると中国共産党による「インテリ批判」「プチブル批判」を「ベタ褒め」しているようにも見える。しかし、ここまでの文脈からいっても、平野がそうした視点からものを書いているとは考えにくい。むしろ、どうしてそう誤解されそうな文章を著したのかを考へる必要がある。平野は、丁玲たちが共産党を批判したこと自体を問題視しているわけではない。自分と同じ作家でインテリという立場の人間にとって、体制を根底から小気味よく批判することはそれほど難しいことではないため、批判自体が自己目的化してしまふことの危険性を指摘している。この丁玲の姿には、当時中国で行われていた批判政治を戦前の日本に重ね合わせて「恐怖政治」視する日本のインテリ層が二重写しにされている。

批判運動の意義を見失って運動を全否定した丁玲を引き合いに出すことで、中国で起きていることをよく理解しないまま「ファッショもイヤだが、共産党もイヤ」で済ませてしまふ日本のインテリ層への批判が伏在している。言い換えれば、自身の拠って立つ「立場と観点」を認識することの難しさ、自身が思いもよらない観点に根付いていることに気付くことの難しさを示唆するために、このように際どい表現をとつたのではなからうか。中国の抱える問題を批判しながらでも伝えたかったのは、中国にはあつて日本に欠けている「反省」「自己批判」であつた。

もちろんその「インテリ」「プチブル」に自分自身が含まれることを平野は忘れない。

戦犯の帰還者である私自身、「元の木アミ」になりそうなのと思ひ合わせられるものがある。その昔、インテリの悲哀という風な言葉が流行つたのを丁玲女史は再び今は感じていないだろうか。

自分自身もいつ「丁玲」になり、中国を「洗脳」の国と見る立場になるか分からない、そういう危惧を持ち続けている。決して「思想改造」を完了し終えたという立場には立たない。問題性の「外部」から批判を展開するのではなく、自身もその問題系の「内部」に存在しているという立場に立つ。これは戦犯を「外部」の視点から暴力的に断罪するのではなく、共に帝国主義戦争の犠牲者だったという「内部」の視点から戦犯を人道的に処

遇した中国側の姿勢と通ずるところがある。

決して中国と同一化するのでもなければ、戦前と変わらない要素が残る日本に染まるのでもない。その何れもできない以上、平野は一つ次元を繰り上げて対応した。つまり、中国の現実に対する批判的視点を一旦は受入れながらも、どうして新中国ではそんな誤解を招くようなことをしているのかと次数を上げて問い直すことで、その限界を捉えつつも可能性を評価するというアプローチをとつた。

こうした困難な視点を保ち続けること自体が、「玉手箱」を日本で開けてみた結果であつた。

(いしだりゅうじ／亜細亜大学)
(ちゃんほんぼ／明治学院大学)

(1) 戦犯教育とその結果としての加害認識については、「PRIME」(明治学院大学国際平和研究所)各号に掲載された拙稿を参照。張・石田「加害の語りと日中戦後和解」(三〇号、二〇〇九年一〇月)九一〜一〇三頁、石田「寛大さへの応答から戦争責任へ」(三一号、二〇一〇年三月)五九〜七二頁、石田「中国の戦犯処遇方針にみる『寛大さ』と『厳格さ』」(三三三号、二〇一〇年一〇月)六七〜八〇頁。また、岡部牧夫ほか編「中国侵略の証言者たち」(岩波書店、二〇一〇年)、野田正彰「戦争と罪責」(岩波書店、一九九八年)も参照。

(2) 一九五六年七月三一日付。

(3) 中国帰還者連絡会編「帰ってきた戦犯たち

ちの後半生」(新風書房、一九九六年)三六頁。
(4) 中国帰還者連絡協議会・新読書社編「侵略 中国における日本戦犯の告白」(新組新装版) (新読書社、二〇〇二年)。

(5) 平野零児「満州の陰謀者 河本大作の運命的な足あと」(自由国民社、一九五九年)。

(6) 八〇年代初期までの代表的な回想録として、斎藤美夫「最後の戦犯は語る」(私家版、一九六八年)、島村三郎「中国から帰った戦犯」(日中出版、一九七五年)、吉開那津子「湯浅謙」消せない記憶 湯浅軍医生体解剖の記録」(日中出版、一九八一年)。

(7) 「迎えてくれた旧友は、皆親切だ。夏冬は一切の衣類も、他人にひけをとらないものを整えて贈ってくれた。いきなり単行本を二冊、出版することができて、……」平野零児を本にする会編「らいちゃん 平野零児随想集」(私家版、一九六二年)一七一頁。

(8) 帰国後しばらく経って「認罪」を後退させた飯守重任(東京地裁判事として復職)でさえ、帰国直後はメディアに対して「戦犯容疑で取り調べを受けたが、公平で全く紳士的だった」と答えていた(註2参照)。

(9) 野上の「私は毒瓦斯攻撃に参加した」のほか、田神忠章「致珠と拳銃」、黒田一一「警保主任」、高尾三郎「生贄」が収録されている。管理所で書いた手記を、記憶を頼りに再構成したと考えられる。帰国から出版まで二ヵ月程度という短期間で書き上げられ、帰国間もない頃の瑞々しい感性が伝わってくる。

(10) 「本書が計画されましたのは、新聞紙上で、ひやかし半分を書きたてられた、いわゆ

- る「洗脳」とか、「総ザンゲ」という言葉の意味する事態が、釈放戦犯掃国者にとって何を意味し、またどのような過程を経て得られたものであったかを、読者のみなさんに、ひいては日本国民の一人一人に知っていただきたかったからです。」(野上今朝雄ほか「戦犯」(三一)警房、一九五六年)一七九―一八〇頁)。
- (11) 平野零児「中共からもらった玉手箱―掃国戦犯「今浦島」の悲哀―」(「文藝春秋」一九五六年一〇月号)一三〇―一三八頁。掃国後もつとも早い時期に発表された文章の一つである。
- (12) 平野、同上二三二頁。旧漢字や旧仮名遣いは、適宜現代のそれに改めた(以下同様)。
- (13) 「或人は「濁れ」といい、或人は「元の黙阿弥になるだろう」というが……」(同上)一三八頁。
- (14) 同上二三七―一三八頁。
- (15) 略歴については、おもに前掲「人間改造」および「らいちゃん」の記述に基づいている。
- (16) 米濱泰英「日本軍「山西残留」―国共内戦に翻弄された山下少尉の戦後」(オーラルヒストリー企画、二〇〇八年)。
- (17) 山西省人民検察院編「偵訊日本戦犯紀實(太原)」(新華出版社、一九九五年)四二〇―四二二頁。
- (18) 前掲「人間改造」三三三頁。他にも、井伏鱒二らが平野との交流を振り返る文章を残している。例えば、井伏鱒二「平野零児の楽天性」(「井伏鱒二全集第十九巻」筑摩書房、一九九七年)二九七―二九九頁など。
- (19) 前掲「人間改造」六頁。
- (20) 前掲「人間改造」二二一―二二二頁。
- (21) 前掲「中共虜囚記」二〇二―二〇三頁。引用中にある「ありのまま」という表現には、文字通り受け止められない側面があることは、ここまで何度も確認してきている通りである。
- (22) 「ただ「洗脳」だとか「思想改造」とは一体どんなことをさせられたんだいという人々への簡単な答えにすぎない」(同上、二〇二頁)。
- (23) 前掲「中共からもらった玉手箱」一三八頁。
- (24) 注7を参照。もとは平野本人が著作集として準備していたものらしいが(三五七頁)、本人による整理が不十分で初出情報などが記されていないという問題点がある。掃国後の他の作品としては、新聞連載に「西陣太平記」(「京都新聞」一九五九年―六〇年)、「こんなもんや物語 みなと太平記」(「学校太平記」(「神戸新聞」一九六〇年)絶筆)がある。
- (25) 前掲「らいちゃん」四九―五二頁。
- (26) 前掲「らいちゃん」五七―五九頁。一九五七年頃に書かれたものと推測される。引用は五八頁から。
- (27) 掃国後久しぶりに経験して驚いた「地震の揺れ」と、当時の社会主義諸国での「政治体制の揺れ」が掛けてあり、後者も前者と同じで原因の解明も予測も難しいことを示唆している。
- (28) 前掲「らいちゃん」六〇―六四頁。
- (29) こうした側面は、永年軍事訓練団に収容されていた他の戦犯も言及している。例えば、小俣佐夫郎「残留 日中友好への誓い」(私家版、二〇〇三年)一一九頁。
- (30) ここでは、この政治的洞察の妥当性の検討が目的ではなく、「洗脳」言説に対する平野の向き合い方の特徴を抽出するための分析であることを断っておく。
- (31) 「ほんとうは、何もかも余り変わっていないのではないか、とも先日考えている(中略)まだ新しい歴史の発展をたどるところまで踏み出していないのではないかと思っっている。」(前掲「中共からもらった玉手箱」一三八頁)。

特集 略奪文化財返還問題

- 日韓会談と文化財返還問題……………李 洋秀 2
- 朝鮮文化財略奪の舞台——韓国・江華島……………荒井信一 12
- 日本側からみた流出文化財の問題点と解決への課題
……………韓国・朝鮮文化財返還問題連絡会議 18
- 日本の侵略戦争にともなう文化財被害とその返還について……………森本和男 27
- 公文書管理法の施行とアーカイブズ……………川村一之 37

米軍接收資料の返還と731・細菌戦資料の行方（上）……………近藤昭二 59

自由社版・育鵬社版教科書の採択阻止のために……………儀 義文 65

東アジア歴史・人権・平和宣言 連続インタビュー講座〈第2回〉

ダーバン宣言って何だ？……………上村英明 89

——植民地主義と人種差別の歴史的責任を問う

- ✓【連載】加害の語りと戦後日本社会①……………石田隆至・張 宏波 48
「洗脳」言説を越えて加害認識を伝える——戦犯作家・平野零児の語りを通じて
- 【連載】日本における戦争博物館の復活④……………南 守夫 81
「科学・技術」の名による戦争博物館（上）——所沢航空発祥記念館を中心に
- 【連載】歴史観×メディア＝ウォッチング④……………高嶋仲欣 99